
殺意百パーセントのワイン

金雀枝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺意百パーセントのワイン

【Nコード】

N7935R

【作者名】

金雀枝

【あらすじ】

僕、三澄郁と友人、折紙千里はとある一件で関わった知り合いの刑事、間島さんから昼食を奢ってもらうということから駅前に集まっていた。

そんな折に間島さんのケータイに着信。それは警視庁からの連絡で事件が起こったから現場に急行するようにという旨だった。

殺人ではないはずなのに自殺にしては不可解な点の多い事件現場。果たして真相は？

事件編

八月十一日、僕は家から自転車で十分ほど行ったところにある駅前に到着した。

東京の中ではあまり都会ではないここら辺だが流石に駅前はそれなりに賑わっている。

そもそも東京というのはどこもかしこも人が多過ぎるんだよな。田舎から出てきた僕は当初随分と驚いたものである。それに東京の人は皆急いでいるし、まあ本当に急いでいるのは住んでいる人じゃなくて東京という街自体なのだろうけど。

それにしても暑いな。僕は憎々しげに上を見上げる。そこには憎たらしいほどに燦々と眩しく輝く太陽があつた。

初日の出とかはめでたいことこの上ないし、基本的に晴れることはいいことだと思う。雨になったら中止になってしまうこととかもあるからな。

ただこんな日ばかりは流石に太陽を憎々しく思ってしまう。今日は最高気温三十五度を回るらしい。今夏の流行スラング猛暑日というやつである。

なんでも今年の暑さの原因はペルー沖の太平洋赤道付近の海面温度が低下するラニーニャ現象とかいうのが原因らしい。昨日の夕方のニュースでやっていたのだ。ちなみにそのペルー沖の太平洋赤道付近の海面温度が上昇することはエルニーニョ現象というらしい。去年の夏から秋や去年の冬から今年の春などに観測されたそうである。ういえばよく聞いたような気がするでもない。

どうしてペルーなんて遠い国の海面温度が低下することによって日本の気候が左右されるのか。無学な僕には理解できない。

僕はペルーについてだつてよく知らない。面積も人口も通貨も大統領もわからない。首都がリマだということぐらいは中学校の地理でやったような気がするけど。というかラニーニャ現象についての

科学的なメカニズムはまだわかっていないらしい。ただラニーニヤ現象が発生した場合、エルニーニョ現象と同じく異常気象が起こる傾向にあるそうだ。

ラニーニヤ現象が起こった場合は日本では夏暑く、しかも冬寒くなるそうだ。勘弁して欲しい。この夏の異常気象だけでも参っているというのに冬も寒いだなんて。

地球のしっぺ返し。僕の頭の中に小中学校の頃に何度も聞いたその言葉が響く。これが地球のしっぺ返しというやつなのだろうか。そうだとするなら地球よ、これからは優しくするからそろそろしっぺ返しをやめてくれないかな。もつと仲良くしようぜ。憎しみの連鎖からは何も生まれないんだよ。

などということを考えながら辺りを見回していると僕はようやく探し人を見つけることができた。

背中まで届くロングヘアの少女を見つめる。彼女の名前は椎奈千里。黒いワンピースに黒いサンダルという彼女らしいシックな服装をしている。サンダルと言っても僕が楽だから穿くようなものではなくヒールの付いたおしゃれなものだ。ところでヒールというのは疲れたり痛かったりするのではないだろうか。少なくともずっと背伸びをしているとい体勢は辛い。支えられているとはいえどうなのだろう。女子のオシャレは根性というやつなのかもしれない。

その美貌は通り過ぎれば振り返らざるを得ないという感じた。実際に現在進行形で振り返られている。

その手には真っ黒なブックカバーを纏った本がある。また小難しい本を読んでいるのだろうか。

僕は手に持っているケータイで時刻を確認すると十一時半。待ち合わせの時間は十一時四十分だと言っていたから時間的にはまだまだ余裕があるな。

別に僕は常に十分前行動に重きを置いていたりするわけではないのだが今日は家で特にやることがあるわけでもないので早めに家を出た。

僕は千里に対して手を振りながら呼びかける。

そして彼女は僕を一瞥すると「チッ」と舌打ちをした。

「人の顔見ていきなり舌打ちかよ」

なんて腹の立つ奴だ。だがこの程度はいつものことだ。もちろん納得はしていないけどこの程度のことではイチイチ目くじらを立てていたらこいつと会話なんて成立しない。僕は大人だからな。

「一体今日はどうしたんだ？」

僕は呆れながらそう尋ねる。まず話を聞いてやることだ。大抵は話を聞いてやれば機嫌が少しはマシになる。

「郁のくせにこの私より遅れてくるなんて何様のつもり？もしかして自分が偉くなったとか勘違いしてしまったのかしら」

危うく大人な僕でもカツとなってしまいそうなセリフを言い放ってくる。言葉の槍だ。雨のように降り注ぐ言葉の槍だ。それにしてもとんでもない理由だった。ちなみに郁というのは僕のファーストネームだ。

「何様のつもりでもねーよ。むしろお前が何様のつもりだよ？大体まだ間嶋さんが来てないんだから問題ないだろう」

今日は実は警視庁捜査一課七係の係長をしている間嶋さんという人から事件解決に協力したということから食事をご馳走になるのだ。つまり間嶋さんが来なければ動くことができないのだから待たせたことにはならないだろうと僕は思う。

「そういう問題じゃないの。あなたが私より後に悠々と来たことが気に入らないの」

「どういう理屈だよ。それに別に悠々と来たつもりはない」

やれやれ今日はご機嫌斜めだな。いつも斜めだから正確には一段とご機嫌斜めだが。

「で、結局今日はどうしたんだよ」

やや傲慢不遜なところのある千里だが僕が自分より遅れてきたというだけで舌を鳴らすほどには短気じゃない、と思う。おそらく何か他に嫌なことあって僕に奴当たりしているのだ。それはそれで問

題だけだな。

「別に何にもないわよ」

千里はそんな風に行つてそっぽを向いてしまふ。可愛くない奴だ。大方お父さんと何かあつたのだろう。

おりがみちさと

折紙千里。僕、みすみかある三澄郁とは同じ高校でクラスメイト。成績優秀。

具体的には学年二位。ちなみに僕は中の上といったところか。得意科目は本人曰く英語と科学。僕からしたら得手不得手がないように見えるが。誰も興味ないかもしれないが僕の得意科目は国語と英語。容姿はかなりの美人。本性が知られていない最初の頃はよく告白されているところを見た。父親は警視庁ナンバーツ一の警視副総監。さらに幼少時よりその父親から柔道や剣道をやらされていたのとですさまじく強い。僕が5人いても敵わないだろう。

頭脳、容姿、家柄、運動何をやらせてもトップクラスの成果を残す何とも厭味な女だ。全て完璧な彼女なのに意外なことに友達が少ない。理由はおそらく、いや間違ひなく彼女の対人能力の低さだろう。自ら進んで他人と交流しようとしなのはもちろんのこと。何かと目立つ彼女だから仲良くしようと、話しかけようとする者はいるけど彼女はそれを突き放すのだ。そういう性格だと普通なら褒められるべき能力の高さも不思議と嫌味に見えてくるものらしい。それと美人だが気の強そうな見た目が合わさって今ではすっかり敬遠されている。周囲からは高飛車な奴だ、みたいに思われているのだろう。まあ仲良くなつてみるとそんなに悪い奴でもなかったりする。もちろんいい奴でもないし、プライドが高いところもあるけどもだ。そんな変わり者の椎奈千里と極々平凡な小市民たる僕の出会いは高校に入る前の春休み。彼女とはそれ以来の付き合いだ。

自分でも何で一緒にいるのかわからない。

千里に近づこうとする奴等の中には彼女の能力の高さへの羨望を持つ故の、まるで光に集まる羽虫のような者も多かったが少なくとも僕はそれではないと断言できる。

むしろ僕は千里のような優秀な人間は苦手だ。嫌いなわけじゃないが苦手なのだ。凡庸極まりない自分の凡庸さが際立つようだから。彼女は僕の劣等感を刺激するには純分過ぎるぐらいの人物だ。

僕みたいな凡人が稀代の才女である彼女の隣にいていいのだろうかと思うこともある。

それでもなんでか一緒にいると楽しいから一緒にいる。こんな感じが一番しっくりくる気がする。

その一方で千里が僕のことをどう思っているのかは分からない。もしかしたら僕如きの奴のことなんて体のいい下僕ぐらいにしか思ってくれていないかもしれない。それでも別にいいけどさ。

「全くそれにしても今日は暑いわね。まさにうだるような暑さという感じだわ」

千里は僕らの真上に燦々と輝く太陽を一瞥して憎々しげにそう呟いた。そうは言いつつも彼女は一筋の汗も流していない。やっぱり鍛えているからなのだろうか。

「あなたもまた倒れないように気をつけなさいよ」

彼女はペットボトルの水に入った水を飲みながら横目で僕を見てそう言った。

そうなのだ。僕は今年の夏に、正確には丁度一週間前に一度脱水症状で倒れてしまっているのだ。諸事情あって街中を駆けずり回っていたのだが、大量の汗に水分や塩分の補給が追いつかず倒れてしまった。

その時はこの折紙千里に散々馬鹿だの情けないだの罵られた。彼女は実能的確に人の傷口を抉り取るのだ。

それにしても結局のところ彼女は どうしてイライラしているのだろう。さっきも言った通りおそらくはお父さん関係のことだと思うのだが、せっかくおいしいものを食べに行くというのに横でこんな風に不機嫌でいられるというのは、ごめんこうむりたい。せっかくのおいしい料理もまズくなるというものだ。

ここはストリートに何があつたのか尋ねてみるべきだろうか、と思つたりもするのだが下手に刺激してこっちに火の粉が飛んできても嫌だな。

それに聞いたところで僕なんかのアドバイスで役に立つとも思えない。

千里の感情は僕にはちつとも読めない。今どんな気持ちかぐらいは表情を見ればある程度推察できるものの僕がどういう行動をしたらどうという反応をするのか全く読めないのだ。

善意で行動したら千里が口から火を吐かんばかりに激怒したなんていうこともある。

女心と秋の空なんていう言葉があるが千里のような人間の心と秋の空が同じならば秋は大層過ごしにくい季節だろう。異常気象どころか天変地異だ。

余談だがヨーロッパの方に男心と秋の空なんていう言葉があるらしい。意味は男の愛情はすぐにその対象がまるで秋の空のようになるところと移り変わりやすいという意味。まあつまりは男は浮気性だという意味だ。

これに関しては男である僕としては一言申したいところだが割愛させていただく。男である僕だけが自分の心理描写で一方的に意見を述べるのもフェアじゃないと思うからだ。別に上手く意見を述べる自信がないから逃げているわけじゃない。あくまで泣く泣く割愛するのだ。僕はスポーツでもテーブルゲームでもフェアプレーを愛する男だからな。

それから五分ほど僕と千里は楽しく、談笑し続けていた。

するとそんなところにやっと三人目である間嶋さんが黒い車に乗って登場した。

確かあの車は間嶋さんの所有している車ではない。間嶋さんの所有している車は青い色をしていたはずだ。

それならあの車はなんなのかという話になる。確かあれは覆面パ

トカーだ。僕は既に大分嫌な予感がしている。きつとなんらかのことに巻き込まれる。

間嶋さんが車から降りてくる。スーツと言い本人と言い相変わらずどこか草臥れた様な人である。

「事件だ。協力してくれ」

僕は強引に間嶋さんの車に乗せられる。知らない人が見れば誘拐騒ぎだ。

「あーあ。嫌な予感がしたんだよな。間嶋さんが奢ってくれるって言った時から不幸体質の僕には身にそぐわない幸せというかなんというか」

「そうばやくなよ。また今度奢ってやるからさ」

間嶋さんはハンドルを握りながらそう答える。

僕は東京のとある高級住宅地に来た。目の前にはまさに豪邸ですという感じの家がある。デザインも金にかまけた成金趣味という感じではなくどこかセンスの良さを感じる。

「いいよな。俺もこういう家が欲しいぜ」

間嶋さんが羨望の目で邸宅を見ながらそう言った。事件が起こったというのに間嶋さんは欠片も緊張してないようだ。まあそれでも間嶋さんの気持ちもわかる。僕の家もお金のある方ではないし、将来的にこんなに稼げるような気もしない。今は就職難だからな。僕が大学を出る時ぐらいまでにはなんとかなっていればいいけど。

「それほどでもないかしら」

千里はそんなことを言う。これだからブルジョワは。こいつには少しばかり金銭面で痛い目に遭ってもらいたいものだ。

「いやいや、こいつはかなりでかいだろう。まあ死んだのはこの家の主らしいがな」

「そうなんですか」

「ああ、どれだけ栄華を極めても死んじまったら何にもなんねーんだよな。虚しいものだ。事件の方はおそらく殺しだろうな」

「なんでわかるんですか。刑事のカンですか」

僕は冗談交じりにそう言った。

「そんなところだな。この家見れば分かるだろ。金持ちって奴は大抵嫌な奴なんだよ。そして嫌な奴だからみんなに恨まれている。あ、千里ちゃんや鶏冠井警視副總監は別だぜ」

酷い偏見だ。そして最後の一言ではまるで取り繕えていない気がする。間嶋さんの首が心配だな。まあ娘の千里と違って父親の折紙警視副總監殿は人格者だからそれほど心配はないだろうが。

僕達三人は豪奢な門をくぐり中に入っていく。門をくぐる時に事件現場特有の重い空気を肌に感じた。

中に入ると間嶋さんの係の主任である沖さんが部下に指示を出していた。奥には事件の関係者だろうか私服のためとてもじゃないが警察官には見えない四人が椅子にかけている。

「おはようございます、係長。今日は君たちも一緒なんだね」

沖さんは僕と千里を見てそう言う。沖さんとは三回ほど事件現場で会っているのだ。この人は非常に友好的だが僕達が捜査に口を出すことに眉をしかめる人もいる。まあ実際に何度か事件を解決に導いていることと千里の父親のこともあって前回辺りからは文句も言われなくなっただけだ。

「で、捜査状況の方はどうなっているんだ」

間嶋さんは不謹慎にも欠伸を噛み殺しながらそう言った。まあ生理現象なのだから仕方ないといえば仕方ないけどさ。

「はい。死亡したのは阿部巽。年齢は四十一歳。この近くでレストランの経営をしています。最近をよくテレビにも出ています。ほら見たことあるでしょ」

そう言っただけで沖さんは阿部さんに顔写真を見せる。その顔は僕もテレビで何度か見たことがあった。たしかイタリア料理界を代表する料理人の一人という紹介をされていた。

「ああ、そっぴや見たことあるな、この顔。こいつ料理人だったの

か。いけすかない奴だと思つてたんだよな」

間嶋さんは苦虫をかみつぶしたような顔でそう呟く。確かに妙に
気取つていて僕もあまり好きにはなれないタイプだと思つていた。
まあそれでも腕は確かで女性人気はあるようだし所詮は凡人故のや
つかみなのだけど。

「係長、不謹慎ですよ。ホームパーティーをしていたところ阿部さ
んが急に倒れ、救急車と警察を呼んだが救急車が来る前に死亡した
そうです」

「つてことはここには死体はないんですよね」

僕は沖さんに確認を取る。

「ああ。そうだけどそれがどうかしたのかい」

沖さんはなんでそんなことを聞くのだろうという表情をしている。
「いえ、何でもありません。邪魔をしてすいませんでした。続けてく
ださい」

良かった。不運なことというかなんというか高校に入ってから
数回ほど死体を見る機会があつたのだが僕は中々慣れない。

千里へ見ても驚きはするものの悲鳴一つ上げないというのに。そ
ういうところも凄い奴だと思う。

「つたくよお昼間からパーティーなんかしてんじゃねーよな」

間嶋さんは再び欠伸を噛み殺しながらそう言った。退屈をしてい
るのか睡眠不足なのかはわからない。

どちらにせよ刑事という職業柄ゆえか殺人現場という極めて特異
な日常と乖離したこの場所でもあまり緊張していないようである。

「係長、横道にそれないで集中してくださいね」

沖さんはそんな真島さんを冷ややかな目で睨みつかながら咎める。
「わかつてるつて。死因の方は？」

「青酸カリによる窒息死です。被害者が飲んでいたワインから検出
されています。今のところ自殺の線が有力かと」

「ほう、なぜだ？」

間嶋さんは目を丸くして驚く。もしかして本気であんな理由で殺

しだとも思っていたのだろうか。だとしたら呆れた話である。

「凶器が青酸カリですし、その青酸カリも阿部巽さんがスズメバチ退治ということで購入したものです。ワープロですが遺書も見つかっています」

「なるほど。なら自殺の線で捜査してみるか」

間嶋さんはそう言っただけの捜査員たちに指示を出し始める。僕達二人は邪魔にならないよう少し離れたところに移動する。

「なあなあ、千里。青酸カリを阿部巽さんが購入したものというのと遺書が自殺の要素なのはわかるけどなんで青酸カリが使われているということ自体が自殺の要素なんだ？僕はむしろ殺人っぽい気がするんだけど青酸カリって苦しいんだろ」

青酸カリは胃酸と反応し有毒な気体となり内臓を壊死させ窒息死に至らしめる。というのをどこかで聞いたことがある。おそらくあの残念な姉から聞かされたのだろう。

医学の知識がないので詳しくはわからないが内臓が壊死というのはすごく痛そうなのがする。まあ窒息死という時点ですでに苦しもうでもあるが。

「やれやれ相変わらずの中途半端に狭くて浅い知識ね。来世ではリユゼツランにでも生まれ変わることを推奨するわ」

千里はやれやれと言ったように目を閉じて首を振りながらそう言った。

「なんだよそれ」

「リユゼツランはユリ目の観葉植物よ。成長が非常に遅く種類によつては花を咲かすのに数十年を要するものもあるわ」

千里は自慢げに自信の博識ぶりを披露する。相変わらず嫌な奴だ。「そうじゃない。いや、確かにリユゼツランのことは知らなかったけどもだ。青酸カリのことを知らないくらいでそこまで言われるいわれはないだろうって言っているんだ。むしろマイナーワードだ。日常生活で高校生が使う単語じゃない。そこまで言うのもリユゼツランに失礼だけだな。いいから教えろ」

ちくしょう。嬉々として人の傷口をえぐりやがって。なんて性格のねじ曲がった奴なんだ。

「そうやって律儀にツツコミを入れるのって疲れない？」

「疲れるよ。お前のせいだな。さっさと答える」

全くなんてイライラする奴なんだ。

「命令口調が若干気に入らないけど一応親愛なる友の頼みだから特別に聞いてあげることにするわ」

なんだかんだ言っても説明はしてくれるんだよな。こいつは。優しいところもなくはないのだ。こういうところをもっと出していけば友達も増えるのに。まあ無理か。

「青酸カリは確かに自殺には向いているとは言えないけどそれ以上に殺人に向いていないのよ」

「どうしてだ？」

「まず青酸カリの致死量200ミリグラムっていうのは意外と多い。次に青酸カリは非常に繊細な物質なのよ。熱で変性するし空気に触れるだけで使い物にならなくなる。だから料理にいれたりどこかに塗っておいたりっていうのも難しいわね。まあ今回はワインに入っていたわけだからこれは関係ないけどね。それでもワインは強い酸性だからワインの中に入れたら反応してすごい異臭がするから飲むうとして顔を近づけたら普通は気付くわ。これもカプセルにでも入れておけばいい話だけどワイングラスだったら普通気付くでしょ。そして今回の様な経口摂取の場合一番問題なのが味なのよ」

千里はわざわざ決め顔まで作ってそう言った。今回の事件のポイントなのだろう。

「味？」

僕は言われたことをそのまま聞き返した。まるでインコのようにいや芸になるだけインコの方がはるかにマシか。

「そう、味よ。当然、実際に飲んだことはないから具体的な味はわからないけどものすごく苦くて知らずに飲んだらまず吐き出してしまつらしいわ。ましてや亡くなった阿部さんは料理人。味覚が鋭い

のは言うまでもないでしょうしね。200ミリグラム摂取させるのは難しいわ」

なるほど。ということだ。これは自殺なのだろうか。だとしたらどうしてわざわざホームパーティーの時に自殺なんてしたのだろうか。自殺というのは普通もつと一人でひっそりとやるものだろうか。大体自殺するほど落ち込んでいる人がホームパーティーなんかするだろうか。時々どうせ死ぬなら他人を巻き込んでやるっていう奴もいるけども。それでも僕は何か不自然さを覚えた。

とりあえず事件の関係者である四人に事情聴取をするそうだ。

間嶋さんがスーツの内ポケットから手帳とペンを取りだす。

「では、まず皆さんのお名前とご職業、それと阿部さんとの関係の方をお聞かせ願えますか」

「私は田上純也といいます。阿部さんの店で働かせてもらっています」

田上さんは三十代半ばぐらいだろうか。年の割には随分とファッショナブルな格好をしている。眉間に深く刻まれたいくつもの皺から神経質そうな印象を受ける。

「私は長内秋江といいます。私も阿部さんの店で働かせてもらっています」

長内さんは田上さんと同じぐらいの年かな。さつき煙草を吸っていた。美人だが冷たそうな人だ。

「沢井玲一です。僕もお二人と同じで阿部さんの店で働いています」

沢井さんは大学を卒業したかしてないかぐらいだろう。穏やかな雰囲気を持っている。

「阿部七海です。売れてないからわからないと思いますけど一応職業は役者。あの人との関係は親子」

七海さんは僕や千里より二、三個年上ぐらいといったところか。

『あの人』という表現にお父さんとの関係が全て表れているような気がする。

「そうですか。では、次に皆さんはここでホームパーティーをしていたということでしょうね」

「よろしくないです。私はあの人が死んだって呼び出されたんです」
七海さんがそう答える。

「阿部さんの自殺の動機について何か心当たりはありますか？」

「え？あの人は自殺なんですか」

また七海さんだ。

「ええ。青酸カリをワインに混ぜて飲ませる場合はおいと味が強烈なので一流の料理人である阿部さんに飲ませるのは無理です。ですからまだ断定はできませんが自殺の可能性が高いかと思われます。ところで今のは他殺だと思っていたという風に聞こえますが」

確かにそう聞こえる。

「まあそうですけど」

「それはなぜですか？」

「あの人は周りから恨みを買うタイプの人ですし、それに超の付くナルシストで自殺なんかしないと置いていたからです。てっきりどこかの愛人にでも愛憎のもつれとかで殺されたのかと」

七海さんは長内さんの方を見ながら言う。

「七海ちゃん、言いたいことがあるならはつきり言ったらどう？」

長内さんは七海さんを睨みつけるように見据える。

「あーそうですか。それならはつきり言ってやりますよ。貴女が殺したんじゃないんですか。あの人の愛人だった貴女がね」

七海さんはしてやったりという顔だ。

「あら、つまり私に動機があると言いたいよね」

「ええ、そうですよ」

「えっとそれは本当のことなんですか」

間嶋さんが委縮しながらも質問する。無理もないだろう。まさに修羅場というところだ。

「はい、本当です。でも私はやっていませんよ。それに動機という点ならここにいる他の三人方も十分に当てはまりますわ」

長内さんはあつさりと認める。そして動機があるのは自分だけではないと言いだした。

「勝手なことを言わないでくれ」

田上さんが反論する。

「それはどういうことか説明してくれますか？」

「いいですよ。まず田上さんは阿部さんに独立の話を潰されてますよね。相当に恨んでいたはずですよ」

「だからって殺人までするわけがないだろ。馬鹿馬鹿しい」

田上さんは席を立てて激する。田上さんが阿部さんを殺したかどうかはともかく殺したいぐらいに恨んでいたというのは本当だろう。「七海ちゃんはお父さんのこと嫌いだっただでしょう？」

「だからなに？このぐらいの年にはありがちなことなんじゃないの」七海さんは投げやりに答える。

「だってあなたは母さんが死んだのはお父さんのせいだと思ってるんじゃないの」

「母さんのことにアンタが口を出さないで」

七海さんは噛みつくようにそう言った。

「あら、凶星かしら。そう言えば暴力も…」

「長内さん、やめなよ。いくらなんでもやり過ぎだ」

沢井さんが長内さんの言葉を遮り彼女を咎める。

「先に突っかって来たのはあつちでしょ」

「相手は子供です。貴女は大人ですよ。少しは大人の対応をしてください」

「なによ。あなただって恨んでいたでしょ。料理の腕は阿部さんに引けを取らないのにもいつも理不尽な叱られ方をしている沢井さん」

長内さんは意地の悪い笑い方をしながら沢井さんの方を見る。それでも沢井さんは表情を変えなかった。

「確かに好きではありませんでしたよ。でも今はそんなことは関係ないんじゃないかな。刑事さんだって自殺の可能性が高いって言う

「ているんだから」

「まあまあ皆さん落ち着いて」

間嶋さんが三人をなだめる。

「それにしてもあの人も死んでまで他人に迷惑かけなくてもいいのに。死ぬなら一人でひっそりと死んでほしいものだわ」

七海さんが毒づく。

「七海さん、お父さんを悪く言うものじゃないですよ」

間嶋さんが穏やかな口調で諭すようにそう言った。

「なによ。私が父親のことをどう言おうと私の勝手でしょう」

七海さんは間嶋さんを睨みつける。流石役者さん、良い目力をしているような気がする。

「それもそうですがね。さてそろそろ事情聴取はやめにして真相解明としましょうか。千里ちゃん、どうやら今日は君の力は借りなくて済むようだけ」

間嶋さんはペンと手帳を内ポケットにしまい、ソファから立ちあがる。僕は何かとてつもなく嫌な予感がした。

「真相って阿部さんは自殺じゃないって言うんですか？」

長内さんがそんなこと言う。他の皆も怪訝そうな顔をしている。まあ自殺だって言っていたのはこの人自身なんだから無理もないだろう。

「ええ、私もついさっきまではそう思っていましたよ。しかしこれは殺人なんです。犯人は巧妙なトリックを使って我々の目を欺こうとしたんですよ。しかしこの間嶋正孝の目は欺けなかった」

「その犯人というのは一体？」

皆が期待に満ちた目で間嶋さんを見ている。僕としてはあまり期待し過ぎない方が良い気がするけどな。

「それは阿部七海さん、あなたですね」

間嶋さんは声高らかに雄々しくそう言い切った。

「いえ、違います」

あっさりと普通に平然と否定された。まるで日常会話をしている

かのようなトーンだ。

「ハハハ、犯人は皆そう言うんですよ」

間嶋さんはめげずに迷探偵の常套句のような事を言う。

「そんなの滅茶苦茶じゃない。大体あの人死んだ時その場にいなかった私がどうやってあの人に毒を盛るんですか？」

「そんなことは簡単ですよ。あらかじめ毒を入れておいたんですよ」
「どこに？」

七海さんは真島さんをすごい剣幕で問い詰める。

「ワインの瓶の中にですよ。余程よく見なければ毒を入れた痕跡は見つからないでしょう。あなたはここに住んでいるんだいくらでもその機会はあつたはずですよ。そして事件後その瓶をすり替えておけばトリック成立だ。あなたはどうかや警察より数分早く現場に到着したようですしね。動機はおそらく父親への憎しみというところかな」

やや決めつけ過ぎな気もするが筋は通っている気がする。

「あのーすいません」

間嶋さんの推理の途中だが沢井さんが口をはさむ。間嶋さんは自分の見せ場を邪魔されたためかうつとうしそうな顔を沢井さんに向ける。

「なんですか、沢井さん？」

「そのワイン持ってきたのは僕なんですけど」

衝撃の告白だった。

「え？今なんて言いました？」

間嶋さんはなんとも間抜けな表情で聞き返す。

「ですからそのワイン持ってきたの僕なんですよ。阿部さんがそのワイン好きだったので手土産にと思ひまして。それと…」

「なんでそれをもっと早く言わないんだ」

そう言つて間嶋さんは頭を抱える。自信満々に推理外したせいで大恥かいたからな。気の毒に思う。そもそもトリックってほどのトリックじゃないけどね。

「いや、ちよつと待てよ。ということは沢井さん、あなたが犯人じゃないですか」

間嶋さんは沢井さんをビシツという音が聞こえてきそうな勢いで指差す。

「最後まで聞いて下さいよ、僕もそのワイン飲んだんですよ。でも何ともなかったんです。長内さんと田上さんも見ましたよね」

沢井さんが二人に確認を取ると二人とも頷いた。

「なるほど。これも違うということか」

「間嶋さんもうやめた方が良いんじゃない」

千里が忠告する。これ以上恥をさらすのは止めるか。千里にしては中々良心的な忠告だと思う。

「推理をか？」

「刑事を」

嗜虐的な暴言だった。刑事を辞めるだなんて酷過ぎる。

「ちよつと待って下さいよ。沢井さんと阿部さんは同じワインを飲んだんですよ。だとしたら他のお二人は何を飲んだんですか？」

「我々は白ワインを飲みましたよ。魚料理だったんでね。でも阿部さんと沢井さんは赤が好きなので赤を飲んでいたというわけです」

田上さんはそう答える。

「もしかしたら誰かがあっちのキッチンに入れてトレイが何かに乗せてリビングへ持ってきたのではないですか？」

「ええ。長内さんはこの家の勝手をよく知っているので彼女が入れて持つてきました」

家の主人の代わりにか。まさに内縁の妻という感じた。長内さんが何かに気づいたように忠告を入れる。

「刑事さんが何が言いたいかは大体わかりますよ。その時に私が毒を入れたんじゃないかって言うんでしょうね。ですがキッチンはリビングからは丸見えですし、それにワイングラスは私が渡したわけではなく阿部さんが自分で取ったんです。阿部さんからの二つのグラスの距離も大して変わりませんでしたよ。それとも刑事さんは私

が二分の一の確立に賭けたとか誰でもいいから殺したかったナンセンスなことをおっしゃるつもりなのですか」

長内さんは挑戦的な目で間嶋さんを見据える。間嶋さんは見事にやり込められてしまったようだ。

「そうか。わかったぞ」

間嶋さんはまた何か閃いたようだ。しかし向けられるのは疑惑の目だ。仕方ないだろう。

「阿部さんの隣の人がこっそりとグラスの中に入れたんですよ」

その言葉に長内さんと沢井さんが田上さんの方を見る。その方法ならば不可能ではなさそうな気がする。

「どうやらあなた的那样ですね、田上さん」

「それは無理だな。私は阿部さんの右隣りにいたのだが彼は左利きだ。それゆえに彼のグラスは彼の左にあったのだからね」

「うーん、だとするとこれも違うか」

「というかアンタはさっきからどうも我々を犯人にしたいみたいだが青酸カリは味とにおいがきついから飲ませるのは不可能だってアンタ自信が言っていたじゃないか。そのところはわかってるんだろうな」

田上さんはすごい勢いでまくし立てる。余程怒っているのか血管が浮き出ている。どうやら神経質そうだと思っていたのは当たっていたようだ。

「あー、いやそれはまだですね」

「わかってないのかよ。チツ、警察つてのは本当に適当な仕事しやるな」

間嶋さんも随分ひどいことを言われている。千里は呆れてしまったのかどこかにフラフラっとなってしまふ。

僕もなんとなく千里についていく。

「どこに行くんだよ」

「自殺だろう他殺だろうと間嶋さんに任せておけないわ。真相は私突き止める。とは言っても十中八九自殺でしょうけどね」。

千里は鑑識さんに何かを聞きに行ったようだ。

僕は僕で何か探してみるか。並べられた証拠品を見てみる。

財布と一緒に袋に青酸カリの購入の時に書いた書類の控えと思われるものがある。ここに入っているってことは財布の中にあっただことだよな。

それって何か都合が良いというか何か作為的なものを感じるな。僕なら自殺するのにわざわざレシートなんて取っておかない。

他殺でしたら阿部さんが本当にスズメバチの退治用に購入したものを犯人が凶器に使ったってことだよな。そしてレシートを見つけやすいところに入れておいた。容易に想像できるな。

どうも自殺にしては不自然だ。そういえば遺書がワープロで書かれていると言っていたな。それも不自然と言えば不自然な気がする。遺書をワープロでというのはどうも無機質で虚しい。僕らのような世代ならともかく亡くなった阿部さんは四十にもなる大人だ。

他には酒やたばこのレシート群。どうも最近は著しく量が少ないようだ。健康を考え始めたということか？ 死のうとしているのに？ それもまた妙な話である。

探せば探すほど不自然な点が出てくる。

ん？ これはなんだ。大崎大学病院内の薬局の袋。大崎大学病院というのはこの近くにある大学病院のことだったはずだ。中身は亜鉛。何の事だかさっぱりだな。亜鉛と言うと原子番号30番で元素記号はZn。人体中では骨に多く含まれる。摂取量が少ないと貧血などになる。僕が知っていることはこの程度か。

そんなことを考えていると僕の視界の端に沖さんの姿が映る。どうやら何をやっているわけでもないようなので少し話を聞いてみるか。

「沖さん、遺書のことなんですけど」

「ああ、どうやら阿部さんのパソコンで書かれたもののようなね」
なるほどそうなのか。でも阿部さんのパソコンを使って遺書を書くぐらいのことならば娘の七海さんはもちろんこんな場に呼ばれる

あの三人にもチャンスはあるはずだ。

「じゃあ、阿部さんの持っていたあの処方箋何だかわかりますか？」

「それが大崎大学病院の方に問い合わせてみたんだが全く分からないくてね。阿部さんが大崎大学病院を訪れた形跡が全くないんだ」

「そうなんですか。それってもしかしてお金払うから病気のことを秘密にしてくださいとかそういうことですかね」

そう言うことが実際にあるのかどうか分からないが阿部さんのような有名人ともなれば秘密にしなければいけないこともあるかもしれない。

「どうなんだろうね。だとしたら徹底的に聞き込みしないとわからないだろうな。自殺に関係なさそうだから調べる必要もないだろうけどさ」

亜鉛か。待てよ。たしかあれの原因は亜鉛不足じゃなかったか。

でもそんなことが本当にあるのか。だってあの人は、

「郁、さつきからちよろちよろしているけど何かわかったのかしら」
考え事をしていると後から千里にそう声をかけられた。

「当然だろ。僕はお前の相棒だぞ。お前こそ何もわからなかったわけじゃないよな」

僕は挑発するような目で挑発するようなことを言う。

「郁如きが誰に口をきいているのかしら。であなたのわかったことってのは？」

千里は飢えた肉食動物のような鋭い目で睨み返してきた。思わず冷や汗をかき後ずさりしてしまう。顔が整っているからか怒ると本当に怖い。

それにしても如きって何だよ。如きって。僕だってそれなりに頑張っているんだけどなあ。そりゃ確かに僕は凡人の中の凡人のような男かもしれないけど。こいつの隣にいるにはふさわしくない人間かもしれないけど。

「多分だけど阿部さんは病気だったんじゃないかな」

僕は千里に自分の考えを話す。正直言っただけでもそんなバカな

って思う考えだが千里ならそこから何かわかるかもしれない。

こいつは何でも知っていて何でもお見通しの『名探偵』なんだから。

「なるほどね。流石間嶋さん、あそこで間嶋さんが粘らなかつたら殺人犯を取り逃がすところだったわ」

「じゃあこれはやっぱり殺人なのか」

僕は自分で殺人の可能性があるとは思っているもののそれがどう行われたかについては全く見当がつかない。でもこいつなら。

「ええ。巧妙なトリックで自殺に見せかけられたれっきとした殺人よ」

千里は口の端に僅かに笑みを浮かべながらそう言った。これはそう、全部見えている時の表情だ。

巧妙に仕組まれた犯人のトリックを解いてやったと嘲笑っている意地の悪い笑みだ。

僕は静かに事件の解決を確信した。

被害者である阿部巽さんを取り巻く四人の人間、そしてその四人ともに四者四様の動機がある。

しかし四人ともに阿部さん殺す術はない。

それでも『名探偵』はこれはれっきとした殺人だと言った。果たして真相は一体？

事件編（後書き）

良ければ感想をお聞かせください。犯人予想などもお待ちしております。

解決編

僕と千里が皆のところに戻ると事件は自殺で片付こうとしているようだった。だがそうはいかない。犯人は今も僕等を上手く欺いてやったとほくそ笑んでいるのだろうから。

「私、犯人わかつちやいました」

千里のよく通る声が殺人現場という重苦しく静かな空間に響き渡った。今、ここに殺人事件の幕を下ろすための推理ショーの幕が上がる。

本当かよ。それ？」

間嶋さんが驚愕している。

「おいおいまた間違いなんじゃないだろうな」

「そもそもあなた達二人は誰なの？ どう見ても警察官には見えないんだけど」

田上さんと長内さんからそんな風に言われる。間嶋さんのあの推理の後では無理もないかもしれないけど嫌な感じだ。こっちは真剣にやっているというのに。

「まあまあ自分が犯人じゃないなら堂々としていたらいいじゃないですか。それにこいつ高校生ですけど今までいくつも事件を解決しているんです。少し話を聞く価値ぐらいあると思いますよ。それともなんですかね。何かやましいところでもあるんですかお二人には」
僕の言葉に二人とも渋々と言った感じで押し黙る。

「まず一番の障害である阿部さんに青酸力りを飲ませる方法ですが阿部さんは亜鉛を医者から出されています。それに禁煙をしている上に飲酒の量を少なくしている。そうですね、七海さん」

千里は七海さんに確認を取る。

「亜鉛は知りませんがお酒とたばこのことはその通りです。でもこれ事件に何の関係があるの？」

七海さんはなんのことかわからないという顔をしている。

「一見全く関係なさそうですが関係大アリなんですよ。味覚障害って知っていますよね。主に亜鉛の欠乏などによって味覚に異常をきたしてしまう病気です。飲酒や喫煙なんかも原因の一つですね。阿部さんはおそらくかなり酷いもので味なんて全く分らなかった。これが世間に知られてしまったらカリスマ料理人である阿部さんは終わりだ。だから医者に口止めをした上、七海さんやレストランで働いている人達にも何も言わなかった。しかし愛人である長内さんはそのこと知っていたんじゃないですか？」

千里は長内さんを睨みつける。長内さんはそれから逃げるように目を下に背けた。それでも千里は睨み続ける。

長内さんはちらちらと千里の方を見るだけだ。そんなやり取りが数分続くと長内さんがようやく観念したように溜息を吐く。

「わかったわよ。認めるわ。そこまでわかつているなら隠すも何もないしね。確かに彼は半年ほど前から味覚障害だったわ。でも原因不明で亜鉛はいくつか試している治療法のひとつなの。彼は今の輝きに固執してそれを手放そうとしなかった。それでも私はいつか自分から皆に話してくれると信じていたの。結局思わぬ形で叶わなくなってしまったけどね」

長内さんは寂しそうに言う。例え内縁の妻でも本気で阿部さんのことを愛していたのかもしれない。

「ちよつと待ってくれ。じゃあ阿部さんは一年もの間、味覚障害のことを誤魔化し続けていたということだろう。そんなことが本当に可能なのか」

田上さんが反論する。僕も自分で思いついた時は半信半疑だった。千里が再び口を開く。

「私も難しいと思いますが事実阿部さんは味覚障害でしたし可能だったということでしょう。おそらく数え切れないぐらいフライパンを振り、包丁を振ってきた経験ということでしょうか。言い方は悪いですが腐っても一流の料理人ですね」

「阿部さんは味覚障害だったのか全く気付かなかった。しかしまだ

問題が残っているだろう」

どうやら田上さんも自主的に聞く気になっているようだ。

「ワインと反応してしまった場合の異臭についてですね。もちろんそのトリックもわかっていますよ。ノンアルコールワインって知っていますか？」

「アルコールゼロのワインそんなものがあるんですか？」

七海さんが驚愕している。それにしてもノンアルコールワインか。そんなものがあるとは僕も知らなかった。

「ええ、ワインが渋かったり、お酒に弱いせいで飲めない、そう言った人でも飲めるためのワインですよ。一パーセント未満のごく少量のアルコールもしくは全くアルコールが入っていないワインです。中にはワイン品評会で入選するような立派なものもあります。流石に料理人であるお三方は驚いていないようですね」

千里のその言葉に三人とも頷いた。

「ええ、うちの店でも取り扱っていますから。昼からお酒を飲みたいという人もいるのでね」

代表して田上さんが答える。

「ノンアルコールワインは通常のワインより酸度が低いいため青酸カリと反応しなかったわけです。ノンアルコールワインの中から阿部さんの気に入りのワインに香りの似ているものを選ぶ。ノンアルコールワインというものはもと後で香りを付けるものですからこれも大して問題はないでしょう。阿部さんは味覚障害で飲んでも気付きませんからそれで誤魔化せます。あとはこっそりとワインボトルをアルコールの入ったワインとすり替え、グラスを洗い再び阿部さんの口に付け持ち手に指紋を付着させ本物のワインを注ぎ青酸カリを入れたんです。やることは多いようですが一つ一つは簡単な作業。二人の隙を付けばいいだけなら可能です。ちなみにすり替えられた証拠にワインボトルには誰の指紋も付いていません。グラスに注いだはずの長内さんの指紋もね。当然そんな芸当ができたのはただ一人ワインを手土産に持ってきた沢井玲一さん、あなたです」

千里はゆつくりと腕を上げ沢井さんを指差す。

「そういえば我々に警察や七海さんに連絡するよう言ったり指示を出したのは沢井君だったな。私は電波が悪いため外に出て電話していた……」

「私もです。でも沢井君は家の中にいた」

田上さんと長内さんは沢井さんを見る。疑惑と恐怖の念が入り混じった目だ。今まで自分たちと同じ阿部さんの身勝手な自殺に巻き込まれた被害者だと思っていたのが一転して殺人者かもしれない。そんな風に思っているのだろう。

「アハハハ、やだなあ。二人とも、彼女の言っていること真に受けているんですか？ 僕が家の中にいたのは医者から応急措置をするように頼まれたからです。まあ特別な道具がなかったせいで特に何もできませんでしたがね」

「確かに酸素吸入器や亜硝酸アルミなんてあるはずもない一般家庭のできる応急除地なんて水で洗浄するぐらいでしょうからね」

酸素吸入機も亜硝酸アルミも僕にはよくわからないが、おそらく青酸中毒の際の治療に必要なものなのだろう。

「らしいね。病院の人もそう言っていたよ。それに僕は阿部さんが飲んでいたものと同じワインを飲んでいるんですよ。ワインボトルに青酸カリが入っていたというのならばなんで僕は平然としているんですか。やはりこれは自殺なんですよ。それとも僕は青酸カリを飲んでも死なないというのかな、探偵気取りのお嬢さん」

沢井さんはふざけた口調で千里を挑発する。

「探偵気取りじゃなくて名探偵です。……そうですね。おそらくワインを飲んだ時のあなたは青酸カリを飲んでも死ななかったのでしょうか。あなたは非常に頭がよくそして用心深い。だからアルコールゼロワインを使ったことがわかってもしかなくともなかなるように。自らワインを飲んでおいたんです。でも私はこのトリックももう解けていますよ」

「いいよ。それなら発表してみればいいじゃないか。でもこれだけ

僕の名譽を傷つけておいて間違いましたじゃ済まないよ」

「別にいいですよ。絶対に間違っていないから。犯人はあなたです」

千里と沢井さんは睨み合う。

「青酸カリは胃酸と反応して毒に変わる。世の中には青酸カリを飲んでも低胃酸症だったため症状が軽かったり全く苦しまなかったりする事例があるんです。だからあなたは強酸症の人が飲むような胃酸を押さえる薬を大量に飲んだんです。胃酸と反応さえしなければ青酸カリは毒ではありません。全く出なかったわけではないでしょうが少量なら肝臓で解毒できます」

千里はひとしきり説明を終えた後、自慢げに笑みを浮かべた。

「証拠はおそらくどこかにワインボトルがあるでしょう。あなたはこの家から出てないそうですしね。有力候補としてはワインセラーの中とかかな・これだけ大きな家でその主人がワイン好きだ。ワインセラーぐらいあるのでしょうか？」

千里のその言葉に長内さんが静かに頷いた。

「何かもお見通しなんだね。驚いたよ。数か月考えたトリックをたったの二時間で破られるだなんて。せめて証拠隠滅の時間ぐらいは稼ぐつもりだったのに。まさか警察じゃなくてこんな子供に見破られるなんて。いやこんなは失礼だな。ものすごく頭の切れるお嬢さんだ。完敗だよ。清々しいぐらいだ」

沢井さんはそう言っとうなだれる。悔しくてというより緊張の糸が切れたようだ。間嶋さんが沢井さんの両手に手錠をかける。

「私のせいですか？」

七海さんが今にも泣きだしそうな表情でそう呟いた。千里の推理では沢井さんが阿部さんのパソコンを使って遺書を書いたり、阿部さんの購入した青酸カリを使用することができたのは沢井さんと七海さんが親しくしているからとのことだ。

「私があの人に暴力を振るわれていることを沢井さんに打ち明けてしまったからなんですか？」

七海さんは責任を感じているのか目に涙を浮かべている。

「自惚れるなよ。君と仲良くしていたのは料理長に取り入るためさ。君に対して特別な感情は一切ない。あつても僕は他人のためにそこまでできる人間じゃない。僕は他人の才能に嫉妬し、味覚障害になつても過去の栄光に取り憑かれて嘘を吐き続けるアイツが許せなかつただけだ。料理人のくせに自分の舌に嘘つく奴は料理人失格だろ。料理人失格のくせに一流料理人を気取り続ける奴は人間失格だ。人間失格の奴は殺されて当然だろう」

沢井さんは悪びれる様子もなく淡々と話す。だがその表情に僕は寂しげなものを覚える。

そんな僕の隣で千里がおもむろに口を開いた。

「確かに被害者の阿部さんはお世辞にも善人だったとは言えないのかもしれない。でもね。これはあなたに大切な人がいてその人のために殺人を犯したと仮定してですがね。あなたの行動は間違っています。大切な人がいる限りは絶対に殺人を犯してはいけません。罪に塗れた手じゃ大切な人を抱きしめられないのですから。こんなことは貴方の自己満足でしかないのですよ」

その言葉に沢井さんの表情がほんの一瞬だけ崩れたような気がした。

こうしてどこまでも悲しい今夜の事件の幕は閉じた。

あの後、警察の人が駅前まで送ってくれた。僕は深く重いどんよりとした溜息を吐いた。

「うわ、辛気臭」

隣にいる千里が辛辣な言葉を投げかけてくる。よく落ち込んでいる人間にここまで酷い言葉を言えるななどと僕は変な感心を覚える。「僕はどこまでも無力だなあと思つてさ。何の役にも立たない。結局事件もお前、一人で解決したようなもんだしさ」

というか事実そうだ。僕なんて必要じゃなかった。

改めて鶏冠井千里という女の凄さがわかった。僕みたいな凡人が

こいつの横にいていいのかという不安になる。

その思いがそれでも一緒に、となりにい続けたいという思いと強い摩擦を生む。

「無力なんかじゃないよ。郁自身がどう思っているかは知らないけど少なくとも私の役には立っているわよ。アンタと一緒にいると何だか落ち着くし、元気が出るから」

「え？」

千里の口から意外な言葉が出て僕は思わず聞き返す。千里は僕をまっすぐに見つめている。

かと思っただけでくるりと後を向いてしまった。

「ほ、ほんのちょっとだけだね。さあなんか食べに行きましょう」
そっぴいえば昼食を食べていなかったことを思い出す。

「奢りだよな」

「バーカ、調子に乗るな」

今日、こいつと友達で良かったってほんのちょっとだけ思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7935r/>

殺意百パーセントのワイン

2011年5月28日22時26分発行